

## 博士学位論文審査要旨

2022年1月28日

論文題目：アジア系アメリカ人の映画制作/上映活動 芸術的労働をめぐる

学位申請者：高橋 侑里

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 富山 一郎

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 太田 修

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 錢 鷗

要 旨：

高橋侑里氏提出の学位申請論文は、アメリカにおけるアジア系アメリカ人、とりわけ日系アメリカ人の映画制作とその上映活動の意義を、主としてドキュメンタリー制作と上映に焦点をあてながら検討したものである。調査対象地域としては主に米国カリフォルニア州のサンフランシスコが設定されている。また論文は、序章と終章を含め、全体で7章構成となっている。同論文の特筆すべき点は、理論的フレームワークとして、経済人類学者のデヴィッド・グレーバーの社会運動論をすえている点である。そこではポストフォーディズムにおける労働の変容と、金融資本主義を軸とした認知資本主義の拡大の中で、映画制作と上映活動を、グレーバーのいう「予示的政治 (Prefigurative Politics)」として設定しようとしている。すなわち高橋氏は、映像制作と上映活動を、新たな自己像をめぐる「解釈労働 (Interpretive Labor)」とみなし、そこに抱え込まれる創造性に、この「予示的政治」の可能性を見出す一方で、こうした創造性が、まさしく認知資本主義においては金融資本の投資先としても登場することも議論しようとしているのである。またこうした枠組みの中で、エスニック・ムーブメントやアイデンティティ・ポリティクスの文脈でこれまで議論されてきたアジア系アメリカ人の社会運動の歴史を、ポストフォーディズムのなかでの労働をめぐる抵抗運動として再設定しようとしているのである。以下各章の内容を述べる。

序章では、全体の方法論ならびにアジア系アメリカ人研究ならびに日系アメリカ人研究の批判的検討を、おもに文化人類学ならびにエスニック・スタディーズの研究分野を念頭におこなった。方法論としては人類学的フィールドワークが採用されており、長期にわたるサンフランシスコでのフィールドワークの内容説明がなされている。また研究史の批判的検討において特徴的なのは、制度的枠組みとしてある福祉政策の興隆と新自由主義におけるその後退を、エスニック・マイノリティーの社会運動の歴史的展開と関

連づけて整理している点である。それは次章以降のポストフォーディズムにおける社会運動としてのエスニック・ムーブメントを設定する準備作業にもなっている。第一章では、前述したデヴィッド・グレーバーの社会運動論と芸術論を丁寧に読み込み、高橋氏みずからの理論的フレームワークとして構築する理論的作業が行われている。その理論的枠組みについては、既に述べたとおりであるが、高橋氏はグレーバーの議論を自らの研究に積極的に導入するために、グレーバーが教鞭をとっていたロンドン・スクール・オブ・エコノミクス大学院に留学し、グレーバーから直接学んだ経験を持つ。同章では、こうした留学経験が十分発揮されているといえる。第二章と第三章は、具体的な作品分析と制作者へのインタビュー調査にあてられている。第二章では日系4世のドキュメンタリー制作者であるタッド・ナカムラへのインタビューとその作品分析がなされており、また第三章では、ドキュメンタリー映画『ミリキタリの猫』をとりあげている。この二つの章のポイントは、これまでの日系人研究の軸にすえられてきた戦時期の強制収容所の経験を、こうした映像活動がいかに再解釈し、そこに新たな可能性を見出そうとしているのかという点である。またそこには、2001年9月11日以降の米国社会におけるアラブ系だけではなくエスニック・マイノリティー総体への監視や差別の拡大が問題にされている。すなわちモデルマイノリティーとされてきた日系人が自らの歴史記憶の根幹にある強制収容所経験を再解釈することにより、9.11以降の米国社会での連帯の可能性をいかに見出していくのかということが、この二つの章の主題である。またここでは強制収容所経験と並んで、1960年代のエスニック・ムーブメントの記憶も重視されている。第四章は、上記の検討をふまえ、サンフランシスコでの映画祭や上映活動、文化活動を取りあげ、エスニシティを横断する可能性について検討している。ここでは、ボランティアのような無償労働と、金融資本やIT産業が援助する諸活動が映画制作と上映の場において錯綜していることが議論されており、文字通り新しい文化政治の可能性とそれを商品化しようとする動きのせめぎ合いの場が描かれている。第五章は、こうした金融資本やIT産業が創造力を獲得しようとしている別の場である若手の起業活動が取り上げられている。従来こうした起業活動は、社会運動からは資本ににじり寄る動きとして敵対視されてきた。しかし高橋氏は、そこにも解釈労働が内包する創造性をめぐるせめぎあいがあり、第四章までで検討してきた芸術労働との関連性を指摘している。

審査では、実証がまだまだ不十分である箇所が存在することが指摘されると同時に、アジア系アメリカ人がマイノリティーであると同時にミドルクラスを形成している点をどのように考えるのかといった疑問点が出された。この問題は、ポストフォーディズムとの関係においてもさらに検討する必要がある。しかしながら、学位申請論文全体の価値を損ねるものではなく、こうした問題点の指摘は、申請者の将来性への期待でもあるということも確認され、論文審査委員会は、高橋侑里氏提出の学位申請論文を、博士(現代アジア研究)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

## 総合試験結果の要旨

2022年1月28日

論文題目： アジア系アメリカ人の映画制作/上映活動 芸術的労働をめぐる

学位申請者： 高橋 侑里

審査委員：

主 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 富山 一郎

副 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 太田 修

副 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 錢 鷗

### 要 旨：

高橋侑里氏提出の学位申請論文にかかわる総合試験を、2022年1月28日（金）の10時30分から12時00分まで行った。高橋氏の専門分野である文化人類学、エスニック・スタディーズにかかわる専門知識について、審査委員が試験をし、十分な知識があることが確認された。また必要とされる語学(英語)の能力についても質疑がなされ、十分な能力があることが確認された。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目： アジア系アメリカ人の映画制作/上映活動 芸術的労働をめぐる  
氏名： 高橋 侑里

## 要旨：

本研究では、様々な史的背景を持つ人々が暮らすサンフランシスコ・ベイエリアをフィールドとして、アジア系アメリカ人の映画制作/上映活動について、文化、歴史、政治、経済的側面を踏まえた考察をおこなった。労働の概念を再検討し、社会運動と起業活動に関わって、解釈労働、及び、想像的、創造的労働(Creative Work, Creative Labor)の観点から検討した。

まず序章第1節では、フィールド・ワークの概要について述べた。調査対象とした毎年2月に開催される第二次世界大戦時の日系人強制収容経験を追悼する「追憶の日」と、毎年3月に開催されるアジア系アメリカ人映画祭「CAAMFest」、及び主催者である非営利団体 CAAM(Center for Asian American Media)について詳しく述べた。第2節では、コミュニティで、映画を観る、制作することに関する議論を展開した。エスニック・マイノリティとメディア表象、及び第三世界映画に関わる分析とその問題点について指摘した先行研究について論じた。続いて、モデル・マイノリティ神話の構築過程について論じた。第3節では、戦後福祉政策の隆盛とエスニック・マイノリティの反応について、民営化の流れの中で、草の根の運動がNPOへと組織形態を変えていった過程と社会背景について論じた。第4節では、エスニシティについての議論を展開した。代表的な分析の一つには、客観主義的アプローチの実体論と、主観主義的アプローチの関係論があるが、エスニシティを一般化する試みはいずれも適切ではない点について論じた。加えて、法や制度を超える暴力が常に常態化していることを問題化することの重要性について述べた。第5節では、再びアジア系アメリカ人映画祭についての概要と、人々による組織化についての説明を補足した。

アジア系アメリカ人の映画制作/上映活動に加えて起業活動について考察した本研究では、労働の概念が一つの重要な軸となった。そこで第1章第1節において、非物質的労働の概念、及び解釈労働、想像的、創造的労働について言及し、労働の領域と不可分な関係性にあるアジア系による映画制作/上映活動について、解釈労働の視点からの考察の有効性について論じた。第2節では、フォーディズムからポスト・フォーディズムへの移行に伴う、産業構造の変容と労働の質的変容の変遷を受けて導入された非物質的労働の概念に関して、認知資本労働に関わる労働領域に來たる革命を予感していたネグリとハートの論考へのグレーバーによる批判を参照し、論じた。第3節では、非物質的労働へのアプローチに関わって、現在の労働の概念の問題点について述べた。第4節では、芸術家は労働者なのかという問いを模索し、芸術的労働への考察を深めるにあたって、まず私たちの労働に対する概念について問い直した。加えて、生産者主義から消費主義への移行過程について述べた。第5節では、現代アートの世界が社会にヒエラルキーをもたらしている点について論じた。現代アートによる社会的影響について、無意識的に世界の構造に作用していることについて論じた。第6節では、金融市場と現代アートの世界は癒着関係にあり私たちの世界に無意識的に分断やヒエラルキーを持ち込んでいるが、こうした社会に対して抗う芸術的/創造的労働が持つ抵抗の可能性について論じた。第7節では、芸術作品をめぐる価値と諸価値の抗争に関わって、価値と諸価値について論じた。第8節では、現代の仕事の定義からみた芸術家の労働について考察した。アジア系の映画制作/上映活動は、商品化から逃がられない環境におかれている一方で、貨幣的価値に還元されない人間、社会的関係の構築、集团的組織化が伴っているが故に社会変革のモーメントの可能性を持ち合わせている点について論じた。第9節

では、参与観察と聞き取り調査から得たデータに即して、人々がどのように映画制作に参加しているかについて論じた。第10節では、非物質的労働におけるコミュニズムについて、グレーバーの理論的介入を参照して論じた。非物質的労働の側面を新しいコミュニズム(a new form of communism)を念頭に置き、賃金制を超えた、より広い射程において労働を捉え直すことができる可能性について述べた。

第2章では、日系人の記憶について検討し、ポスト9.11のアメリカ社会において、第二次世界大戦時の日系人強制収容所の経験がいかなる歴史的意義を持ちうるかについて論じた。日系人映画監督、タッド・ナカムラ(Tad Nakamura)自身の経験とドキュメンタリー映画三部作、*Yellow Brotherhood* (2003)、*Pilgrimage* (2007)、*A Song for Ourselves* (2009)を考察の対象とした。映画において想起される記憶を分析の主軸としたうえで、ナカムラの個人的な経験を加味し、彼によって再解釈、描き出された日系人強制収容所の経験と60年代のアジア系の運動経験の意義についての考察をおこなった。9.11後のイスラム・アラブ系に自己を発見したナカムラによって、60年代の運動経験と、現在の不正義に対して立ち向かう人々が重層的に描かれており、日系人強制収容所の経験と他のエスニック・マイノリティの経験が重ねられ想起されている点について論じた。

第3章では、日系二世、ジミー・ツトム・ミリキタニ(三力谷 勉)の生涯と、ドキュメンタリー映画『ミリキタニの猫』を手掛かりに、想起される戦時の日系人強制収容所と忠誠登録をめぐる歴史経験の再検討、及び日系コミュニティのポリティクスを揺るがしうる可能性について論じた。不忠誠者や戦争忌避者に関する戦時経験を歴史研究の観点から検証した先行研究に対して、本考察は、想起された記憶に新しい政治の兆しを見出す試みに重点を置いている。ドキュメンタリー映画において想起されたミリキタニの戦争経験が現在において、如何なる批判的局面となりうるのかを問うている点が、従来の研究と異なる。

第4章第1節から3節では、ベイエリアのアジア系アメリカ人社会は軋轢や分断を抱えているが、いかに人々は団結、連帯しうるかという点に着目し、映画祭と従軍慰安婦像設置の是非の事例について、参与観察及びインタビュー調査から得たデータに即して論じた。また、映画祭空間の祝祭性について、映画祭における参与観察から得たデータに即して、映画上映がもたらすアクティビズムの可能性について言及した。観客は受動的なオーディエンスだけではなく、オーディエンスであると同時に作り手になる点について論じた。続いて第4節から第8節では、慰安婦像建設の是非をめぐるアジア系アメリカ人社会の動向について論じた。サンフランシスコ市役所で開催された公聴会での参与観察から得たデータに基づいて、戦争責任をめぐるアジア系アメリカ人のポリティクスについて論じた。慰安婦像建設をめぐる旧日本軍による性暴力が今一度問われる事態は、日系人にとって戦時の強制収容所の経験が想起させられる事態であった。また、サンフランシスコのアジア系社会では日本と韓国の歴史問題として慰安婦問題は捉えられる傾向にあり、そのためアメリカ国家が不可視化の存在になっている点について論じた。アジア系アメリカ人は、地政学的なポリティクスによる影響、主流社会からの同化圧力に晒されている一方で、同時に未決の可能性を持ち合わせており、可視化されていない被害者との連帯によって補償運動を展開することの重要性について、オランダ-インドネシア系アメリカ人の戦時の経験の証言と現在の運動に即して論じた。

第5章では、「サンフランシスコという場所では、なぜ起業活動と社会運動/芸術的抵抗運動がかくも活発なのか？」という問いを念頭に置き、社会運動と起業活動についての考察を試みた。都市の高級化と警察の暴力がエスカレートする社会に対して人々による警察組織の改革とIT産業、シリコンバレーへの増税を求める現地社会の動向について述べた。次にシリコンバレーで起業を試みる者たちが、現実には不安定な環境での労働を余儀なくされている状況について現地調査から得たデータに即して論じた。一見すると相容れない関係にある起業活動と社会運動ではあるが、新しいテクノロジーを社会にもたらそうとする起業家と、社会のオルタナティブをつくり

だそうとする芸術家の両者の活動には、想像力、創造性が共通していると考えられうる。しかしながら、現在の金融経済と官僚主義が合わさった社会構造では想像力、創造性の発揮が阻まれる。主流社会から排除されてきたアジア系アメリカ人による映画制作/上映活動を遂行するうえでの協働のプロセスには、非疎外的に想像力、創造性が発揮されるモーメントが間違いなく発生している点について論じた。最後に終章では、各章の要点、並びに今後の研究課題について述べた。